古事記は歌ふ

KOJIKI sings

作　永山智行

登場人物

女（作家）
男（編集者）　※

神壱　ホヲリ
神弐　ウサギ
神参　ニニギ
神四　オホヤマツミ／アシナヅチ
神五　イハナガヒメ／クシナダヒメ
神六　オホナムチ
神七　オモヒカネ　※
神八　タヂカラヲ
神九　ウズメ
神拾　スサノヲ　＊

学者　＊
役人

子（読者）　＊

※＊は同じ俳優が演じる

0　千年前

波、の音が聞こえる
若い学者がそれに耳を傾けている。
役人が入ってくる。

学者　海……
役人　え？
学者　海が近いのですか、ここは？
役人　どうして？
学者　今しがた、不意に波の音が……
役人　風でしょう。風が運んできたのでしょう。時々風向きによっては、聞こえることがあります。
学者　では、やはり海が近いのですか？
役人　近くもあり、遠くもあり。
学者　え？
役人　海は、どこにいても海はそのような場所にあります。近くもあり、遠くもあり。けれど海は、いつもわたしたちに何かを運んできます。どこか遠いところから。どこか遠い昔から。――失礼しました。これはわたくしの祖父がいつも言っていたことなのです。いったいどういう意味なのか、いまだにわからないのですが。
役人、ふと口ずさむ。
学者　？
役人　この歌も、いつか海が運んできたもの、なのだそうです。
学者　それもお祖父さんが？
役人　ええ。
学者　いい歌ですね。
役人　……。すみません、お待たせいたしまして。
学者　いえ。
役人　わざわざ宮中までご参内いただきましたこと、改めてお礼を申し上げます。
学者　いえ、このところわたくしも為すことなく暇をもてあましておりましたので。
役人　早速で恐縮なのですが、これがあなたに読み解いていただきたい古文書です。
学者　これは……
役人　これは代々、このオノゴロの国の王の家に伝えられてきた「ふること」の書。どのようにこの国や最初の王が成ったのか、古のそれらのことが記された書とされています。けれど長くその存在が忘れられ、その間に、この書を読める者がいなくなってしまいました。そこに書いてある文字のひとつひとつは見覚えのあるものなのですが、果たしてその文章が何を伝えようとしているのか、それを読み解ける者は、もう誰もいないのです。
学者　それでこれを……
役人　ええ、あなたに読み解いていただきたいのです。あなたはまだお若いが、古の言葉や文字に通じておられる稀有な学者であるとうかがいました。
学者　けれど、（見ながら）少しこれは時間がかかるかもしれません。おそらくこれは、千年以上昔に書かれたもの。
役人　ええ。ですが、なるべくお急ぎいただきたいのです。出来得れば来月の新しい王の即位の礼までに。
学者　なぜそのようにお急ぎになられるのですか？
役人　あなたもご存じのように、今、このオノゴロの国の者たちは、深く傷ついています。
学者　それはあの「風」の……
役人　ええ、あの「強い風」の。あの日、あの「強い風」はこの国の多くの者たちのいのちを奪い、さらに先王とその妃殿下のおいのちさえもさらってゆきました。土地は乱れ、残された人々の心もいまだ癒えず、無為のうちに日々を過ごすばかりです。先王のただおひとりの忘れ形見である新しい王もそのことをひどく憂いておられ、喪明けの即位の礼をひとつの契機として、この国の人々に、日々を生きることの希望や、この国に生まれたことの誇りを取り戻していただきたいとお考えなのです。
学者　まったく尊いご深慮でございます。ですが、わたしのような一介の学者がそのことに、どのようにお役に立てると？
役人　物語が必要なのです。

学者　物語？
役人　ええ。このオノゴロの国がどのように成ったのか、そしてこれまでの王がどのように人々とともにあったのか、つまり、わたしたちはどこから来て、どこへ行こうとしているのか、その物語が、いま人々には必要なのです。
学者　その手がかりがここに、この中にあると？
役人　そうです。この国を覆ってしまったかに思われるこの深い闇を晴らす手がかりが、あなたが読み解いてくださるこの「ふること」の書の物語の中にあると、我々は一縷の望みをかけているのです。
学者　……
役人　どうしました？
学者　いえ、あまりの事の大きさに言葉を失してしまったのです。そうですね。失われた言葉を頼りに、この我々の、この森羅万象の始原にたどり着く、そんな物語をこれから編むしかないのですね。
役人　やっていただけますか？
学者　その物語が、人々の行く道を照らすのならば、長い長い時間をかけて積み重ねられた地層を丁寧に掘り返す考古学者のように、わたしはこの言葉の古層にたどりついてみようと思います。言葉が生まれ、世界が生まれた、その日の風景が鮮やかに見える、そんな物語に。
役人　ありがとうございます。きっとその物語は、これから先の千年さえも照らす光となるでしょう。
学者　これから先の千年……
役人　ええ、千年先のその日を照らす、光……
学者　……

学者は、その千年の先を見る……

0　千年先

女　がゐる

女　さて
　と書きだして

そのあとに続くことばが
あたしにはない
ことに気がついた
さて
さて
さて　いったいなんだ
といふのだらう
いったいどんなことばで
この
この
この
世界
あたし
を
めぐる
めぐる
この世界
を
いったいどんなことばで
切りとれるだらう
切りとったところで
それが
いったい
何になるのか
手にして切りとれるほど
世界はつかまへやうもなく
世界に
切りとりの点線
は　ついてゐない

あれから
あの日から

世界は
無為に
あたしのまわりに
漂ひ
ただ
ただ
漂ひ
あたしは
書くことばもなく
漂ふ
世界
に溶けながら
このまま
このまま
あたしと
世界の
切り取り線さへも
溶けてなくなり
くらげのやうに――
いやいやいや
なりません
あなたの
ことば
それを
待つ人々がゐるのです
あなたが切りとる
世界
それを
頼りに生きる人々
が
今も
この時も
あなたの

男

ことばを
待つてゐるのです
なりません
溶けてはなりません
消へては
なりません
けれど
それはいつたい
誰
なのですか
あたしのことば
それを
待つてゐる
といふのは
いつたい
読者
です
それは分かつてゐます
けれど
読者
それは
いつたい
誰なのですか
それは
それは
それは
それは
あなた
なのではありませんか
あなた
の
ほかに
あなた

女　男　女　男

の
むこうには
誰も
いない
男　ふふ
女　どうしました
男　作家の
苦悩
ですか
もしくは
作家の
孤独
女　え
男　そんな
作家を
たくさん
見てきました
見えない
読者
その影が見えず
時折
筆を折る
そんな
作家の
そんな
無邪気

あなたは
書きさへすれば
好いのです
木こりが森の木を伐りつづけるやうに
漁師が海の魚を獲りつづけるやうに
あなたは

ことばを
書きさへすれば好いのです
その
一言
その
一句
それが多くの人に
糧を与へる
でせう
あなたにも
わたしにも
読者にも
さあ
もう時間です
あなたは
漁にでかけるのです
ほら
表では人々が
あなたが
その岩戸を開き
表へ出で来るのを
待つてゐます
世界は日の出を待つてゐる
そんな古い歌のやうな
この世界
あなたは
そのことばで
この世界を
まるごと
照らすのです

賑やかに聞こえてくる音
♪「世界は日の出を待つてゐる」

“The world is waiting for the sunrise”
どこかで神々が音を鳴らし
踊つてゐるのだらう

音に促されるやうに
女は旅にでた……

1　千年先

女　さて
　　―――
さうしてあたしは
いま
ここにゐる
この海辺の町
あたしが捨てた
あたしを消した
あの人と父ちゃを消した
この海辺の町
潮の匂ひ
波の音
波
なみ
あたしと同じ名前
なみ
波
耳にまとわり
鼻をつき
目を曇らせ
ぜんぶをかき乱す
そんな故郷
この海辺の町
帰つてみやう

二十七年ぶりに
さうしなければ
いけないやうな気がした
何故だか
さうしなければ
さうしてあたしは
ここにゐる

通りすがりの神壱（ホヲリ）が声をかけた

神壱　あのお
女　はい
神壱　知りませんか
女　何を
神壱　わたし
　　わたしの落し物
　　わたしの落とした物
女　あの
神壱　しつ！
女　え？
神壱　言つてはなりません
　　誰にも
女　…ええ
　　それで
　　あなたの落としたもの
　　といふのは
神壱　釣り針です
女　釣り針
神壱　ご存じですか
女　ええ
　　あ　いえ
　　釣り針は知つてゐますが
　　釣り針のありかは知りません

神壱　さうですか
　残念です
　それでは
女　あの

神壱　去る

女　……
神弐　どうも

神弐　立つてゐた

女　？
神弐　どうも
　兎です
女　兎
神弐　ええ
　兎です
　こんにちは
女　こんにちは
神弐　ああ
　いたい
　いたい
女　え？
神弐　ああ
　いたい
　いたい
　ああ
　いたい
　いたい
女　いつたい
　どうしたといふのです
神弐　聞きますか

　聞いてくれますか
　わたしの話
女　まあ…
神弐　それでは聞いてください
　「兎とサメのブルース」

♪まをしまをし
　サメよ
　サメさんよ
　比べてみやう　その数を
　サメと兎の　その数を
　ここに並んでくれ
　この島から　あの気多の岬まで
　おれはその背を渡りつつ
　数えてやらう　その数を

　なんちやつて

　うそさ　うそさ
　ぜんぶ　うそなのさ
　こつちにおれは　渡りたく
　けれど渡るすべなく
　欺きました
　ざまを見ろ

　すると

　はがされました　皮を
　がぶりと　奴らに
　やられました
　まつたく　世の中
　ままならぬ

神弐　…二番です

♪まをしまをし
兎
兎さん
それならこれは　どうだらう
海の塩水　どうだらう
塩水浴びてみて
高い山の　山の上　風浴びて
そしたらじきに治るだらう
教えてくれた　神様が

なんちやつて

うそだ　うそだ
ぜんぶ　うそだつた
通りすがりの　神たちは
けれどただのからかい
欺きました
ざまを見ろ

そして

裂けました　皮が
前よりさらに
痛くなり
まつたく　世の中
ままならぬ

ウー　ウー　ウー

神弐　サンキユウ
女　……

神弐　あいたたた
どうしたら好いでせう
何かご存じありませんか
女　何を
神弐　この傷
この痛みを
癒す方途を
あなたはご存じありませんか
女　いやあ
神弐　いや
あなたは
知つてゐる
知つてゐなくてはなりません
女　どうして
神弐　さういふものだからです
女　さういふもの？
神弐　さうです
あなたは
さういふ者です
女　さういふ
者
あたしが
さういふ
者だと
神弐　知つてゐるはずです
たとへ
あなたは知らずとも
あなたのからだは
知つてゐる
海で生まれた
あなたのからだは
知つてゐる
女　今　急（と）く

此の水門（みなと）に往きて
水以て　汝（な）が身を洗ひ
即ち　その水門の
蒲黄（かまのはな）を取りて　敷きちらし
其の上に　輾転（こいまろ）べば
汝が身
本の膚の如
必ず差（い）えなむ
神弐　なるほど
では早速
ありがたうございました

神弐　去る

女　出来事
確かに
今
ここに在った
出来事
それは
ほんたうなのだらうか
瞬きひとつの間の
夢
何を話したのか　この声が
それすらもおぼろげで
相変わらず打ち寄せる
波だけが
そこには在った
ことば
それは
あたしのことば
だったのか
あたしが話した

あたしのでは
ないやうな
ことば
たち

男がやってくる
何か食べてゐる

男　ああ
ゐたゐた
やはりこちら
だったのですね
苦悩の作家が赴く先は
その故郷
これはもう
地上に作家が
生まれて以来の理です
ならば教えてください
さういふ者は
いったいいつから
この地上にあるのですか
さういふ者
作家と呼ばれ
ことばを紡ぎ
物語紡ぐ者
それは
いったいいつから
この地上にあるのですか
さあ
いったいいつなのでせうね
けれど
はじめにことばはあった
この世のはじまりに

ことばはあつた
それはもうことばと呼べないかもしれないけれど
そこにことばはあつた
そして
ことばがあれば
そこに物語があつた
わたしがここにゐる
そのことを確かめるための
物語
それが確かにあつた
物語
それを記す文字はなく
けれど
だから
口から口へ
だから
からだからからだへ
この物語は
伝へられてきた
ならば作家は
文字を操り
物語編む者は
ゐても　ゐなくても
女　ええ
ゐても　ゐなくても
そのとほりです
だけど
だからこそ
苦悩の作家は
故郷へと行くのでせう
そのからだ
そのからだの奥から湧き流れる
清水のやうな物語

それに再び出会ひ
それをはじめから辿るため
あなた自身の物語を辿るため
女　しかし
男　ええ
女　先刻から何を食べてゐるのですか
男　ああ
「白兎まんじゆう」。これがね…（など土地の銘菓とその説明）

遠くから
うおーん　うおーん
といふ泣き声

女　え
男　どうしました
女　聞こへる
男　何が
女　聞こへませんか
男　何が
女　泣いてゐる
あの声
男　さ
それならば
まずははじめから
はじめませう
女　あの日
二十七年前
あたしは
十七歳だつた
男　その日の
その浜辺へ

女　声を頼りに歩きだす

またも聞こへてくる賑やかな音

1　千年前

学者、読んでいる。

こう言って、うさぎはまたおんおん泣きだしました。
神は、話を聞いてかわいそうだとおぼしめして、
「それでは早くあすこの川口へ行って、ま水でからだじゅうをよく洗って、そこいらにあるかばの花をむしって、それを下に敷いて寝ころんでいてごらん。そうすれば、ちゃんともとのとおりになおるから」
こう言って、教えておやりになりました。うさぎはそれを聞くとたいそう喜んでお礼を申しました。

役人　それが、あの岬の浜辺であった出来事だと？
学者　ええ、おそらく。そのように読むことはできるかと思います。
役人　順調なようですね。
学者　いえ、なかなか手こずっております。ですので、このように読みやすいところから始め、そこから前後や順を問わず広げていこうと考えております。
役人　引き続きどうぞよろしくお願いいたします。
学者　あの、
役人　はい。
学者　いただいたこの部屋のことなのですが、
役人　何か問題が？
学者　いえ。ここはいたく快適で、何も申し分はないのですが、
役人　ええ。
学者　ここから一旦、家に戻ることは……
役人　それだけはご容赦ください。
学者　だとするとやはりわたしはここから出ることはできないのですか。
役人　必要なものはすべて揃えましょう。ですので、その書のすべてを読み解き終えるその日までは、ここにお留まりいただきたいのです。
学者　そうですか。

役人　礼を失していることは十分承知しております。ですが、喪が明け、新王が即位されるまでの時間を考えますと、あなたには多少ご無理をお願いせねばなりません。誠に申し訳ないことではございますが。
学者　いえ。事情は承知いたしました。
役人　では、どうか引き続きよろしくお願いいたします。
学者　わかりました。
役人　では。

役人、出ていく。
学者、書に向かう。

学者　それから千年ほども後のこと――

命（みこと）は、おおぜいのお供の神をひきつれて、いよいよ大空のお住まいをおたちになり、いく重ともなくはるばるとわき重なっている、深い雲の峰をどんどんおし分けて、ご威光りりしくお進みになり、どうどうと下界に向かってくだっておいでになりました。
命たちはしまいに、山の、険しい峰の上にお着きになりました。そしてさらに別の峰へおわたりになり、そこからだんだんと、ひら地へおくだりになって、海の方へ向かって出ておいでになりました。
命は、そこできれいな若い女の人にお出会いになりました。

2　千年先

女　ひとり

女　さて
――
さうしてあたしは
いま
ここにゐる
この同じ浜辺に
同じく遠い

この浜辺に
見たことのある
初めての浜辺に

神参（ニニギ）　やってくる

神参　誰の娘だ
女　え
神参　おまへは
いったい
誰の娘だ
女　あたしは
神参　おまへと
まぐはひたい
女　まぐはひ？
神参　いっしよになりたい
と
言ってゐるのだ
おれは
おまへと
いっしよになりたい
まぐはひたい
おまへはどう思ふ
女　いっしよに
神参　ひとつに
女　なる
神参　なる
成り成りて
成り合はざるところが
あるだらう
おまへのからだの
一所に
おれには

成り成りて
成り余れるところが
一所ある
このからだに
それを合はせて
ひとつに
なり
――
あれ
これは
おれの
ことばか
なんだか
おれが言ったのではないやうな
遠い誰かが言ったやうな
まあ　いい
とにかく
おまへとおれは
ひとつに
なり
女　なり
神参　なり

♪なりなり　なりなり
なりなりて　なりあはざる
ひとところ
なりなりて　なりあまれる
ひとところ
なりなり　なりなり

なるならば
なりあまれるところで
なりあはざるところを

さしふさぎ　さしふさぎ
もうひとつおまけに
さしふさぎ

なりなり　なりなり
みとのまぐはひ
なりませう

神四（オホヤマツミ）と神五（イハナガヒメ）が現れ
神四　歌ひだす

神四　♪なりなり　なりなり
なるならば　姉をもともに
つけませう
なるならば　姉をもともに
まぐはひて
なりなり　なりなり

なつたなら
木の花栄えるごとく
命はなほ岩のごと
栄えませ　栄えませ
もうひとつおまけに
栄えませ

なりなり　なりなり
娘二人と
なりませう

神四　さあどうぞ
姉と妹
二人をそへて

神参　奉ります
姉
と
妹
神四　ええ
神参　姉
は
返さう
神四　帰つてよい
それは何故でございますか
神参　醜い
神四　何と
神参　醜い
怖い
神四　ただそれだけだ
神五　あなたは
うおーん　うおーん

神五　走り去る

神四　では
これより
この時より
あなたの命に
限りが定められませう
神参　どういふことだ
神四　申し上げたでは
ないですか
命はなほ岩のごと
と
あなたの命を永（とこしへ）に
と
その祈りをこめて

姉のイハナガヒメを
あなたに奉つたのに
あなたはそれをお捨てになつた
これより先は
あなたと
あなたの御子孫の
すべての人に
終はり
といふ
命の限りが訪れませう
神参　終はり
終はる
命は
終はる
限りが訪れるその日に
神四　さういふことになつたのです
今日からは

神四　去る

神参　さあ
ならば
さらに取り急ぎ
まぐはひいたさう
時は限られたのだ
限られてしまつたのだ
このひと時を
味わい尽くすため
互いのからだを
味わい尽くすのだ
女　でも
あなたとあたし
――

女と神参　一瞬沈黙の上　見つめ合ふ
まぐはひ
その後

神参　なに
おれの子を
はらんでいるだと
おまへの
そのからだに
女　ええ
神参　たつた一度の
まぐはひで
女　一度だらうと
千度だらうと
さういふものでござゐます
神参　それはほんたうに
おれの子か
女　え
何でございますつて
神参　それはほんたうに
おれの子か
と
さう訊いてゐるのだ
女　あなた以外に
誰の子だと
神参　誰か
そこいらの
誰か
女　……
神参　どうした
女　……
神参　どうしたといふのだ

女　……
神参　おい
女　……
ことば
ことばを
失ったのです
わたしたちは
ことばを
失ふ
いま
それが
わかりました
わたしたちは
ことばを
失ふ
ほんたうの
絶望を
前にしたとき
いや
それはもう
絶望
といふ
ことばですらなく
闇
何も見えない
何も聞こへない
闇の中
わたしに
ことばは
ない
神参　それでおまへは
どうするのだ

女　……
神参　産むのか
その子を
女　……
神参　もう
おれの
この
ことばは
おまへには
聞こへない
そうなのだらう
女　……
神参　おれの
この
……

神参の姿は消へ
男がゐる

男　それはあなたが
十七歳の頃
さうして
あなたは
火を放たれた
家の中で
ひとりの男の子を
産む
女　タケオ……
男　そうです
タケオ
女　これは
男　どうしました
女　あたしの

こと
あたしに
起きたこと
それとも
あたしの
書いた
物語
男　さあて
いったいどっち
なんでせう

賑やかに聞こへてくる音

男　ほおら
また
聞こへてきましたよ
そろそろ
次の
同じ
ところへ
行くのです
あなたは

目の前を兎が駆けてゆく
追ふやうに女も歩きだす

2　千年前

学者は読んでいる。

そのうちに媛（ひめ）は、まもなくお子さまが生まれそうになりました。それで命にそのことをお話しになりますと、命はあんまり早く生まれるので変だとおぼしめして、

「それはわしたち二人の子であろうか」とお聞きになりました。媛は、そうおっしゃられて、

「どうしてこれが二人よりほかの者の子でございましょう。もし私たち二人の子でございませんでしたら、けっして無事にお産はできますまい。ほんとうに二人の子である印には、どんなことをして生みましても、必ず無事に生まれるに相違ございません」

こう言ってわざと出入口のないお家をこしらえて、その中におはいりになり、すきまというすきまをぴっしり土で塗りつぶしておしまいになりました。そしていざお産をなさるというときに、そのお家へ火をつけてお燃やしになりました。

しかしそんな乱暴な生み方をなすっても、お子さまは、ちゃんとご無事にお生まれになりました。

学者　それから千年ほども前のこと――

大神は、かぶら矢と言って、矢じりに穴があいていて、射るとびゅんびゅんと鳴る、こわい大きな矢を、草のぼうぼうとはえのびた、広い野原のまん中にお射こみになりました。そして、若い神に向かって、

「さあ、今飛んだ矢を拾って来い」とおおせつけになりました。

若い神は、正直にご命令を聞いて、すぐに草をかき分けてどんどんはいっておいでになりました。大神はそれを見すまして、ふいに、その野のまわりへぐるりと火をつけて、どんどんお焼きたてになりました。

学者　火を、つけて……。火、を……。火……

火、が生まれる。

3　千年先

そこへ
息も絶へ絶へに
神六（オホナムチ）が飛び込んでくる

神六　こはい　こはい
女　どうしたのです
神六　みんながぼくを
　殺さうとするのです
女　みんな
　みんなとはいつたい
神六　みんなです
　すべてのみんな
　ぼくは
　こはい　こはい
　はじめは兄弟たちでした
　気に入らなかつたのでせう
　ぼくがヤカミヒメと結ばれたのが
　兄たち　弟たちは
　幾度とヤカミに
　求めていましたから
　怒りに兄弟たちは
　まず
　大石を焼いて
　それをぼくに転がし落としました
　ぼくは死に
　そして生き返り
　次に兄弟たちは
　大きな樹を切り倒し
　その下敷きに　ぼくをして
　ぼくは死に
　そして生き返り
　逃げ隠れた先のこの場所で
　今度はあなたの父上が
　ぼくを殺さうとしてゐる
女　あたしの父が
神六　さうです
女　どうして

神六　気に入らなかつたのでせう
　ぼくがあなたと結ばれるのが
女　それは
　どういふ——
神六　ほら
　さういふ間に
　火が放たれたやうです
　この原に
　あちらからも
　あちらからも
　こはい　こはい
　こはい　こはい
女　まずはお逃げください
神六　でもどこへ
　どこへも逃げやうのないこの原で

二人を追いこすやうに
兎が穴へと落ちる

女　穴が
　穴があります
神六　あれ
女　どうしました
神六　あの兎
　あの兎は
女　あの兎は
神六　あの日
　ぼくに
　教へてくれた
　あの兎
女　何を
　何を教へてくれたのですか
神六　必ず

おまへは
賢く　麗しい
女を
得る　と

しばし　見つめる　女と神六

女　さあ
まいりませう
野火が迫つて
二人を焼く前に
あの穴に

あの穴に
二人で入つて
身をひそめ
やがて火は
二人の上を焼け過ぎませう

神六　ならば早速

穴へと落ちる二人
落ちながら二人は歌ふ

♪落ちる　落ちる
落ちるまでの
長い　長い
時
それはけれど
落ちる　落ちる
落ちるまでの
ほんの　ほんの
一瞬

あなたとあたし
二人は落ちる
長い　長い
ほんの　ほんの
ひと時を

遠くから
うおーん　うおーん
といふ泣き声

女　声が
神六　ええ　声が
女　聞こへますか
聞こへるのですか
神六　ええ　聞こへます
女　泣いてゐる
神六　泣いてゐる
女　声
神六　この声は
あなたの
子
その声
さうではありませんか
女　タケオ
神六　タケオ
さういふ名なのですね
あなたの
子は
女　あの子は
神六　ええ
女　いつたい
どこに
ゐるのでせう

遠くから
うおーん　うおーん
といふ泣き声

神六　この先の
ぼくらが落ちた
その先の
もつと昔のあの場所に
あの子はあのまま
ゐるでせう
ぼくとあなたが結ばれた
あの日のままに
あの場所に

女　わかりません
あなたのことばは
わかりません
あなたが
何をいま
わたしに
言はうとしてゐるのか
これはつまり
いまのこと
それとも昔
あるいは先のこと

神六　わかりません
ぼくには
ぼくの
ことばが
わかりません
ただひとつ
たしかなことは
ぼくらがいま
落ちている
その最中
そしていま
落ち
着いた
といふこと

二人は穴の底に着いた
またもや兎が走り去る

神六　さあ
行きませう
この先の
もつと昔のあの場所に

二人　歩きだす

賑やかに聞こえてくる音
♪「世界は日の出を待つてゐる」

4

神々が音を鳴らし
踊つてゐる
神七（どことなく男に似てゐる）は
音を止め

神七　どうだ
神五　だめ
気配すらない
神七　さうか
神弐　もつと奥深くまで
行つてしまつた

なんだか
そんな気がするのだけど
神参　だからおれは
言つたんだ
無理だ　と
こんなことしても
あの女は帰つてこないだらうと
神五　あら
そんなことといつ言つたの
いつ言つた　この神
そんなこと
あたしはちつとも覚えがないんだけど
神参　言つたらう
おれは
あいつ（神七）が
ここで
この岩戸の
この前で
かうして歌はう踊らう
賑やかしくするのだ
と
言つたときに
神五　さうだつたかしら
（みんなに）さうだつた
神参　どうせぼんやり
思つていたのだらう
新しく成つた
あの美しく若い男神のことを
神五　なんですつて
神四　まあまあ
もういい加減にしなさい
神五　ですが
この神が

神四　静かに
いまはそれを争そつてゐるときではない
神参　さうだ
神五　ちよつと
神四　静かに
神弐　で
どうするんですか
これから
神八　あの
わしはいつまで
ここにおれば好いのですか
この岩戸の前に
たしか
少しでも
この岩戸が開けば
わしの力で
それをすべて開け
との仰せでございましたが
いつまで経つても
開きさうにありませんが
神七　うん
いま
それを話しているのだ
神弐　これだから
ただの怪力馬鹿は
神八　む
神弐　いえいえ
なんでもありません
神壱　あの
わたしの
釣り針は
神弐　それはいま
ぜんぜん違うから

神四　（神七に）どうするのだ
もうしばらく
これを続けてみるのか
神七　いまはそれしか
方途はないかと
神四　さうか
さらば
やらう
神七　賑やかに
もつと
賑やかに
やりませう
神参　ま
無理だと思ふけどな
こんなことであの女が
帰つてくるとは思へない
神五　あんた
ちよつと
もう　いい加減にして
無理だと思ふなら
ここにゐなければ好いぢやない
神四　静かに
争つてゐるときではない
さう言つただらう
神壱　あの
わたしの
釣り針は
神四　それも
あとで
神八　わしは
神四　そこにゐなさい
引き続き
さ
やるぞ
オモヒカネ
神七　はい
ワン　ツー　ワン　ツー　スリー　フォー
賑やかに音を鳴らし
踊る
♪「世界は日の出を待つてゐる」

5　千年前

役人　いったいどうしたというのです？
学者　……
役人　わたしがたまたまこの部屋におうかがいした折でしたので、幸い事無きを得ましたが、ですが……
学者　……
役人　いや、もうそのことは申しますまい。今のところ、このことは、わたくしとあなたしか知らないことですから。ですが、どうしてこのような、この部屋に火をつけるというようなことに及ばれたのか、そのことはお話しいただけないでしょうか。
学者　……
役人　ゆっくりお考えください、と申したいところなのですが、喪明けが近づいていることはあなたもご存じでしょう。
学者　……
役人　さ、思い出してください。あなたはその時、この「ふること」の書を読んでおられたのですよね。
学者　…ええ……
役人　そうして、いったい何が起きたというのです？
学者　声が……
役人　声？
学者　ええ。
役人　声が、どうしたというのです？
学者　声が、聞こえた、気がしたのです。

役人　それは、その声は、いったい誰の？
学者　誰の、と言って答えられない、誰かの、ではなく……、それはたぶん……、たとえば、風の音のような、誰のでもある声、だったかもしれせん。
役人　それはつまり、ひとりではなかった、と？
学者　おそらく。無数の音が風というひとつの音をつくるように、無数の声がひとつの声になって響いていた、ように思います。
役人　それで、その声はなんと？
学者　歌っていました。
役人　歌？
学者　ええ。それは確かに歌でした。けれどその言葉の意味はわかりません。何を言ってるのか、何を言おうとしているのか、ただ歌っていたのです、その声は。
役人　そしてあなたはこの部屋に火をつけた……
学者　気づくとわたしはいました、その火の中に。
役人　あなたはつまり、ここから出たい、そういうことなのですか？
学者　わかりません。
役人　ですがそれはもうしばらくご辛抱いただきたいのです。あと十日ほどもしたら、もうその日がやってくる、そのことはあなたもおわかりでしょう？
学者　ええ、存じています。
役人　急ぎ、残りの仕事を成していただきたいのです。これは我が国の存亡に関わる、国家としての大事なのですから。
学者　わかりました。
役人　どうか、千年先をも照らす光、それをあなたの言葉で編んでください。お願いいたします。

役人、深く頭を下げる。

学者　わかりました。作業は急ぎます。
役人　どうぞよろしくお願いいたします。では。

役人、出てゆく。

学者、書に向かう。
と、
風の音、
が聞こえた気がした……

5　千年先

風の中
女と神六がゐる

女　さて
　　｜
　　さうしてあたしは
　　あたしたちは
　　いま
　　ここにゐる
　　この同じ浜辺に
　　同じく遠い
　　この浜辺に
　　見たことのある
　　初めての浜辺に
　　どうして
神六　え
女　どうして
　　ここに
神六　さあ
　　それは
　　ぼくにも
　　わかりません
　　兎が導いた道ですから
　　そもそも
　　「どうして」といふ問ひに
　　答へられる

いつたいどれだけの答へが
この世界にあるでせう
ぼくたちは
ただ
ある
ここに
いま
なぜだかわからないけれど
さうして
ぼくたちは
いま
ここにゐる
この懐かしい
初めての浜辺に

女　音
いまは
音
風と
波の音
波
それだけが聞こへる

神六　それであなたは
なみ
といふ名前なのですね

女　え

神六　なみ
生まれた
あなた
は
はじめに
その
音を聞いた
なみ

女　なみ
ここで
あたし
なみ
と
なつた

神六　なみ

女　……
先刻　あなたは
こう　おつしやつた
誰かが
あなたを
殺さうとしてゐる
と

神六　ええ

女　それは

神六　父上です
あなたの

女　あたしの父が

神六　さうです

女　どうして

神六　気に入らなかつたのでせう
ぼくがあなたと結ばれるのが

女　あたしたち
結ばれるのですか

神六　ええ

女　いつ

神六　いま

女　あたしが
あなたと

神六　ええ

女　そしてそれを
父は

知つてゐる
神六　ええ
女　いま
神六　ええ
女　違う
違う
それは
いま
では　ない
それは
あの日
二十七年前の
あの日
父が
あなたを消してしまつたのは
神六　さうです
けれど
それは
いま
のこと
或ひは
これから
先のこと
そして
二万七千年
前のこと
女　二万七千……
神六　年
前
女　あなたは消へた
神六　ぼくは
ゐます
いま

ここに
女　あなたには
ヤカミヒメ
妻が
あつた
神六　あります
いま
女　そして
あたしに
恋した
神六　恋しています
いま
女　あたしと
まぐはひ
した
神六　しています
いま
女　そして
あたしの父の
火に焼かれ
消へた
神六　ゐます
いま
ここに
女　二十七年前
神六　二万七千年前
女　そして
これから
あたしは
あたしたちは
結ばれる
いま
神六　いま

女　やがて
あたしは
あたしたちは
あの火に焼かれて
消へる
火に
焼かれ
火に
焼かれ
あたしの
からだ
あなたの
からだ
焼かれ
そして
ひとつに
なる
さうだ
焼かれれば
よかつたんだ
あたしも
あの日
あなたと
あの日

遠くから
うおーん　うおーん
といふ泣き声

女　タケオ……

声が
女には聞こへた気がした

声　なりません
消へては
なりません
あなたを
待つ人が
ゐるのです
あなたを
頼りに生きる人
が
いまも
この時も
待つてゐるのです

うおーん　うおーん
といふ泣き声
が大きくなる

6　千年前

役人が入ってくる。
学者の姿はない。

役人はふと、そこに残されたものを読む。

ところがお子さまの建速之命（たけはやのみこと）は、お言いつけをお聞きにならないで、いつまでたっても大海を治めようとなさらないばかりか、大きなおとなにおなりになっても、やっぱり、赤んぼうのように、絶えまもなくわんわんわんわんお泣き狂いになって、どうにもこうにも手のつけようがありませんでした。

そのひどいお泣き方といったら、それこそ、青い山々の草木も、やかましい泣き声で泣き枯らされてしまい、川や海の水も、その火のつくような泣き声のために、すっかり干あがったほどでした。

役人、顔をあげ遠くを見る。

6　千年先

神拾（学者に似てゐる）が泣いてゐる
神弐が驚いてゐる

神弐　ない
ないぢやありませんか
なにも
なにもかも
ない
ない

通りすがりの神壱が声をかけた

神壱　あのお
神弐　？
神壱　知りませんか
神弐　何を
神壱　わたし
わたしの落し物
わたしの落とした物
神弐　それはここに
この海に
失くしたといふのですか
神壱　さうです
わたしは
兄と道具を換へて
海へ出ました
そして
兄の釣り針を
失くしてしまつた
ここの
この海に
（見て）
あれ
ない
ないぢやありませんか
なにも
なにもかも
ない
ない
海が
ない
ない
神弐　なにも
なにもかも
ない
海が
妻は
神壱　わたしが
まぐはふ
はずの
ヒメ
ここに
この海の底の
ワタツミの宮に
住まふ
わたしが
出会ふ
はずの
ヒメは
ない
神弐　なにも

なにもかも
ない
海が

神壱　わたしは
いったい
それでは
釣り針を
もう失くせない
もう出会へず
もう失くせない
海が
なくなつてしまつたからには
そしてもう
わたしは
ここにゐない
あなたに
出会はない
わたしは
ここには
ゐないのだから

神壱　消へる

神弐　あなた
なのでせう
ここを
この海を
すべての
この海を
治められてゐたのは
（うなづく）

神拾　もしや

神弐　その涙なのですね

神拾　この海の
枯れてしまつた
その水は
（うなづく）

神弐　すべての海を
泣き枯らす
その涙は
何故なのですか

神拾　会ひたい

神弐　え

神拾　会ひたい
未だ
見（まみ）へぬ
吾が母
に

神弐　そんなに立派な
そんな髭を持つた
そんな大きな
そんなあなたが
そんなに泣くほど
そんなに会ひたい
その母は
いったいどこに
ゐるのですか

神拾　ここ
ではない
どこ
か
いま
ではない
いつ
か
そこに

吾が母
は
ゐる
神弐　つまり
わからない
と
神拾　うおーん　うおーーん
神弐　はいはい
ちよつと
静かに
してください
神拾　（静かに）うおーん　うおーん
神弐　けれど
どうして
そんなに
会ひたい
のですか
その母に
神拾　それはきつと
母が
わたしの
娘
だから
神弐　え
母が
あなたの
娘
あなたが
母の
息子
ではなく
神拾　わたしは
母の

息子
そして
母は
わたしの
娘
神弐　ちつとも
わからないのですが
神拾　歌ひだす
神弐　あ
いや
ちよつと
神拾
♪あなたと
会つた
その日から
わたしは
ここに
ゐる
ことに
なりました
あなたと
見（まみ）へる
そのことで
あなたの
中に
ゐる
ことが
できるはず

だからどうぞ
会つてください
まだ見へぬあなた
その中で
あなたの中で
わたしは
ゐる
ことに
なりたい

神拾　わたしには
屹度
咎がある
その責めを負わなければ
ならない
わたしには
屹度
咎がある
まだ
見へぬ
母に
あの日
別れた
娘に

神四（アシナヅチ）と神五（クシナダヒメ）がゐる
泣ひてゐる

神拾　どうして
泣ひてゐる
神四　わたしには
八人の娘が
ありました

けれど
千年に
一人づつ
娘は
奪はれ
つひに
この娘ひとり
となりました
その娘も今日
これから
その時を
迎へやうとしているのです

神拾　そもそも
何者なのだ
千年ごとに
おまへの娘を
奪ふ
その者の
正体は

神四　あまりに
大きすぎて
あまりに
激しすぎて
誰も
その姿を
すべて
正しく見た者は
ありません
ただ
ある者は
赤いホオズキのやうな眼をしてゐた
と言ひ
またある者は

その腹は血に塗られてゐるやうだつた
と言ひ
また別の者は
八つの頭と八つの尾を持つてゐた
と言ひ
けれど
八つの谷を渡り
八つの丘を越へる
ほどの
その姿は
誰も
この目で
見ることはできない
のです
それは
ただ
そのとき
そこにあり
さうして
わたしの娘を
わたしの娘たちを
人々を
村を
木や草花を
すべてのいのちを
呑みこんでゆき
後には何も
残さないのです
あなたの名は
クシナダと
申します
こはい
ですか

神拾
神五
神拾

神五　ええ
わたしは
こはい
神拾　この娘を
いただきたい
神四　なんと
神拾　ただ
それだけです
神四　けれど
神拾　わたしは
この娘を
守らう
神四　あなたが
守つてくださると
神拾　ああ
守らう
守りきれるかは
わからないが
神四　さしあげませう
あなたが
さう
おつしやるならば
好いな
神五　ええ

神拾　ひとり
闇に立つ

神拾　さて
――
さうしてわたしは
いま
ここにゐる

この大きな闇の中に
見へない
何も
見へない
それが
空を
覆つてしまつたのか
それとも
これは
それ
そのもの
なのか
わたしは
いま
大きな
闇
のやうなもの
の中に
ゐる

音
だけが
聞こへる
風
高く低くうねる
風
のやうな
水
しぶきをあげ
うごめく
水
のやうな

音
だけが
聞こへる

神拾　剣を構へる
闇に切りつける

何かが
わたしの
頬に
触つた
気がした

ふたたび　闇に切りつける

何かが
わたしの
足首を
掴んだ
気がした

神拾　次第に激しく　何度も切りつける
舞うやうに　けれど　激しく
低い音が　拍子を刻む

神拾　息を切らして

いる
ある
ここに
ある
たしかな
闇

のやうな
その
その

神拾　とりつかれたやうに
その剣を闇に突き立てやうとする
何度も　何度も
けれど次第にその力は失はれてゆく

もう
無理だ
そして
呑みこまれる
わたしは
いま
ここで
この
闇
のやうな
この
この

戦つては
いけなかつたのだ
この
この

さうだ
戦つては
いけない
呑みこまれる
呑みこまれるやうに
ひとつに

なる
のだ
この
闇
のやうな
この
中に
わたしは
あり
この
闇
のやうな
この
そのもの
となる
わたしが
闇
のやうな
これ
であり
わたしは
いま
ともにある
この
闇
のやうな
この
呑み
こむ
わたしが
この
闇
のやうな

この
この
わたしは
わたしこそは
闇
そのものだ

遠くで賑やかに鳴つてゐる音楽が聞こへてくる

静かに明るくなる
神拾と
傍らに神五

神拾　吾
此地（ここ）に来て
我が御心
すがすがし
神五　空が
神拾　ん
神五　雲が
ゆつくり
立ちのぼつてゆきます
神拾　ああ

♪八雲立つ
出雲八重垣
妻籠みに
八重垣つくる
その八重垣を

二人　見つめ合ふ

神拾　さうして

それから
二万七千年の後
あなたは
この浜辺で
ひとりの女の子を
わたしたちの子を
産んだ
神五　ナミ……
神拾　そうです
ナミ
神五　これは
神拾　どうしました
神五　あたしの
こと
あたしに
起きたこと
それとも
誰かの
書いた
物語
神拾　さあて
いつたいどつち
なんでせう
神五　さうして
それからさらに
十七年の後
十七歳になつた
あたしたちの子
ナミは
あの火の中で
ひとりの男の子を
生む

神五　神拾を見て

あなたを
生む

火
が
世界を包む

7

女と神六

神六　こはい　こはい
火が放たれたやうです
この原に
あちらからも
あちらからも
こはい　こはい
こはい　こはい

女　誰が
でも
そんなこと

神六　あなたの父上が

女　あたしの父が

神六　さうです

女　どうして

神六　気に入らなかつたのでせう
ぼくがあなたと結ばれるのが
あなたのその中に
はらんだ新しいのち
その父に
ぼくが

ならうとすることが

女　けれど
この子の
ほんたうの父は
あなたでは
ないはず

神六　それでも
ぼくには
妻がある
そして
けれど
あなたに
恋した
恋して
ゐる
あなたと
まぐはひ
あなたと
結ばれた
結ばれて
ゐる
だから
焼かれなければ
ならない
そう
お考えになつたのでせう

女　やがて
あたしは
あたしたちは
この火に焼かれて
消へる
火に
焼かれ

火に
焼かれ
あたしの
からだ
あなたの
からだ
焼かれ
そして
ひとつに
なる
いま

遠くから
うおーん　うおーん
といふ泣き声

声が
聞こへた気がした

声　なりません
消へては
なりません
あなたは
消へては
なりません
あなたを
待つ人が
あなたの中に
ゐるのです
あなたを
頼りに生きる人
が
いまも

この時も
あなたの中に
待ってゐるのです

うおーん　うおーん
といふ泣き声
が大きくなる

激しい火が
女と神六を
世界を
包む

神弐が現れ
神六を穴の中へと導く
神六　女を残して行かうとする

女　え
どうして
あたしは
神六　この先は
別の穴なんだ
ぼくとあなたのぢやない
ぼくと
あなたぢやない
誰かのための
穴
女　え
神六　それじや
女　あなたは神
じやなかつたの
あたしの神
じやなかつたの

神六　（笑ひ）
ぼくは
ただの
男だ

神六　去る

気づくとひとり
火の中に
残された女

火はますます強くなる

神拾が現れ
覆いかぶさるやうにして
女を火から防ぐ

女は
その姿を見ることはない

火は
神拾を焼き
そして
消へていつた

8

記者らしき人々が
断片的に伝へる
「えー、少女は一命をとりとめ」
「えー、犯人は少女の父親とみられ」
「えー、少女とともにゐた男の行方を」
「えー、男は神を名乗り」

「えー、男は各地の十代の少女たちに」
「えー、父親はその男から娘を取り戻さうと」
「えー、少女と男が暮らす家に」
「えー、父親が火をつけたのは」
「えー、焼け跡から遺体がひとつ見つかつてゐますが」
「えー、それが誰のものか」
「えー、なお少女は妊娠しており」
「えー」

焼け跡の中
女はゆつくりと
立ち上がる
生まれたばかりの
男の子を抱きながら

男がゐる

男　さうして
あなたは
その火の中で
ひとりの男の子を
産んだ

女　タケオ……
生まれました
いま
ここに
生まれました

男　そして
火が消へる
と
ともに
男は消へ
あなたの父も

消へた
女　父ちや……
男　ひとつが消へ
ひとつが生まれ
ひとつが消へ
ひとつが生まれ
ひとつが
女　はじめにことばはあつた
この世のはじまりに
ことばはあつた
それはもうことばと呼べないかもしれないけれど
そこにことばはあつた
そして
ことばがあれば
そこに物語があつた
わたしがここにゐて
そして
この子がここにゐる
そのことを確かめるための
物語
男　そして
あなたは
書いた
書きはじめた
あなたがここにゐて
そして
タケオがここにゐる
こと
ひとりの少年の物語
海辺の町で生まれた
あるひとりの少年Ｔの物語
その成長の物語
あらゆる

ことばで
あなたは
書いた
ことばにならぬ
そのことさへも
あなたは
ここに
記そうとした
あるひとりの少年Ｔの物語

記者らしき人々がやつてくる
口々にこんなことを言つてゐる
「おめでたうございます」
「〇〇文学賞受賞」
「△△文学賞受賞」
「□□文学賞受賞」
「今の気分は」
「おめでたうございます」
「この喜びを誰に伝へたいですか」
「これからの夢を教へてください」
「おめでたうございます」
……

男　それでも
あなたは書いた
書きつづけた
日に日に育つ
タケオを見ながら
その時間のぜんぶを
刻むやうに
あなたは
ひたすらに

やがて、朝。
タケオ（神拾）は出かけようとしている。

男　それから
　数十年の後
　その日は
　やってくる
　三月の
　或る日
　千年に一度の
　その日は
　不意に

タケオ　母さん
女　ん？
タケオ　いってきます。
女　ああ……
タケオ　どうしたの、ぼんやりして？
女　うん、なんだか、ちょっと……
タケオ　え？
女　風……
タケオ　風？
女　なんか、音、変じゃない？
タケオ　風が？
女　うん。
タケオ　ふふ。いつも言ってるだろ。風に音はないんだって。あれは風がだ
　してる音じゃなくて、風が何かを揺らして、それが音をたててるんだって。
女　うん、わかってる、それは。でも、なんだか今日は……
タケオ　何？
女　なんだか、聞いたこともない音がしてる、気がする。
タケオ　昨夜も徹夜？
女　え？
タケオ　徹夜で書いてたんだろ、新しい小説。

女　あ、…うん。
タケオ　忙しいのはわかるけど、でもしっかり体も休めてよ、それだって仕
　事だと思うよ。
女　うん……
タケオ　大丈夫。風の強いのには慣れてる。だって風を見るのが俺の仕事な
　んだから。
女　そうだけど……
タケオ　風を見る。それが俺の仕事。誰にでもできる仕事じゃないんだ。
女　うん……
タケオ　もう行くね、時間だから。
女　うん……

タケオ、行きかけて立ち止まり、

タケオ　あ、母さん。
女　ん？
タケオ　朝ごはん、おいしかった。ありがとう。
女　？
タケオ　（微笑んで）いってきます。

タケオ、去る。

女　タケオ……

けれど、タケオはもういない……
ふっと、風が吹いた。

女　風……
　（見つけて）鳥……
　白い　大きな鳥……

風の音
強くなる

女　あの鳥は
どこへ飛んでゆくのだらう
こんな強い風の中
海
海へ
向かつてゐるのだらうか

風
いよいよ
強くなる

女　さて
と書きだして
そのあとに続くことばが
あたしにはない
ことに気がついた
さて
さて
さて
さて　いつたいなんだ
といふのだらう
いつたいどんなことばで
この
この
この
世界
あたし
を
めぐる
めぐる
この世界
を

いつたいどんなことばで
切りとれるだらう
切りとつたところで
それが
いつたい
何になるのか
手にして切りとれるほど
世界はつかまへやうもなく
世界に
切りとりの点線
は　ついてゐない

あれから
あの日から
世界は
無為に
あたしのまわりに
漂ひ
ただ
ただ
漂ひ
あたしは
書くことばもなく
漂ふ
世界
に溶けながら
このまま
このまま

女　波に漂ふやうに
漂ふ　くらげのやうに

記者らしき人々が

断片的に伝へる
「えー、未明」
「えー、風の」
「えー、本日」
「えー、風が」
「えー、一斉に」
「えー、広範に」
「えー、強大に」
「えー、本日」
「えー、風を」
「えー、これにより」
「えー、未確認の情報で」
「えー、数百人」
「えー、数千人」
「えー、数万人」
「えー、風に」
「えー、現在のところ」
「えー、遺体は」
「えー、亡くなった」
「えー、損傷」
「えー、風で」
「えー、遺体が」
「えー、一日に千人の」
「えー、未曽有の」
「えー、千年に一度の」
「えー、風が」
「えー、」

女　あれから
あの日から
世界は
無為に
あたしのまわりに

漂ひ
ただ
ただ
漂ひ
あたしは
書くことばもなく
漂ふ
世界
に溶けながら
このまま
このまま

女　波に漂ふやうに
漂ふ　くらげのやうに

神拾の姿が浮かぶ

神拾　呑みこまれる
呑みこまれるやうに
ひとつに
なる
のだ
この
闇
のやうな
この
中に
わたしは
あり
この
闇
のやうな
この

そのもの
となる
わたしが
闇
のやうな
これ
であり
わたしは
いま
ともにある
この
闇
のやうな
この
呑み
こむ
わたしが
この
闇
のやうな
この
この
わたしは
わたしこそは
闇
そのものだ

激しい火が
世界を
包む

神拾は
覆いかぶさるやうにして

女を火から防ぐ

女は
その姿を
一瞬
見る

女　タケオ？
父ちゃ？

火は
神拾を焼き
消へていつた

そして　闇

9

神拾　わたしには
屹度
咎がある
その責めを負わなければ
ならない
わたしには
屹度
咎がある
まだ
見へぬ
母に
あの日
別れた
娘に

だから
会ひたい

会ひたい
会ひたい
未だ
見へぬ
吾が母
に
もう一度

だから
どうか
語ってください
母さん……
あなたの
ことばで

見へないものを
見へないものがある
と語る
そのことばで
見へないものは
そこにある
ことになる

死んだものを
死んだものがゐる
と語る
そのことばで
死んだものは
いつまでも
死なない

いつまでも
消へない

あなたの父
として
このうつせみの世に
なつた
わたし

生まれ変はり
あなたの子
として
ふたたび
この世に
なつた
わたし

さらば
みたび
生まれ変はり
この世に
あなたの子
として
なりませう

だから
語ってください
あなたの
ことばで

生んでください
あなたの
からだで

わたしの
この
からだを

神拾の姿は消へ
女が
ゐる

女　父ちゃ？
タケオ？

消へたの？
火　消へたの？
消へた？
タケオ？
消へた？
父ちゃ？
消へた？
消へた？
消へた？

父ちゃ？
タケオ？

賑やかな音楽が鳴り
神弐と神八が
「どうもー」と
走り込んでくる

神八　「家庭のもめはいややねえ」
神弐　「その点、きみは羨ましいね」
神八　「羨ましいとは？」

神弐　「あいかわらず円満にやっとるのやろ」
神八　「あかん、あかん」
神弐　「いつもぼくに自慢しとったやないか」
神八　「そら、ずっと以前や、このごろ、もめどおしや」
神弐　「何が原因でそないもめとんのや」
神八　「孫がでけてね」
神弐　「誰にや？」
神八　「ぼくに」
神弐　「きみに孫ができるような、そんな大きな子どもがいてんのか」
神八　「二十三の娘がおるが」
神弐　「あ、そうか」
神八　「この娘の婿ちゅうのが酒グセが悪うてな」
神弐　「そないクセが悪いの」
神八　「酒乱やね」
神弐　「そらいかんな」
神八　「ぼくが帰るころに、もう先に飲んで寝とん」
神弐　「宵の口に」
神八　「はいな」
神弐　「ふうん」
神八　「で、ぼくが帰った物音に目をさまして、エウワー、酒こうてこい、コラー、とこうや」
神弐　「酒かいな」
神八　「はいな」
神弐　「で、きみ、どないしとんねん」
神八　「瓶もって買いにいくねん、ぼくは」
神弐　「黙って買いにいっとんの」
神八　「買いにいかな、はり倒しよるがな」
神弐　「なさけないことすな、おい、娘の婿の酒をきみがなんで買いにいかないかん、きみは親の立場にあんねん、そんなことで遠慮することあるかい」
神八　「ところが恩があんねん、ぼくは」
神弐　「金でも借りとんのか」
神八　「金を借るなんて、そんな生やさしいものとちがうねん、長年、ぼく

をこれまでにしてくわたぼくのお父さんやねん、親父と娘といっしょになりよって、おもろいやっちゃ」
神弐　「何がおもろいやっちゃ！　ようこんなアホな話しよるわ、こら、無茶苦茶やないか」
神八　「よろし、よろし」
神弐　「きみはええわいな、お父さんのしてることが、まちごうとるやないか」
神八　「本人同士は満足しとるわ」
神弐　「物事はちょっと考えてしゃべれよ」
神八　「なんやねん」
神弐　「きみのお父さんと娘がいっしょになれば、これは孫とおじいさんがいっしょになっとんねん」
神八　「さよう、さよう」
神弐　「おさまってんのやあらへんがな、きょうびはいとこ同士が結婚してでもね、血が濃いからいかんというねん、おまけに孫とおじいさんがいっしょになってみい、いとこ以上に血が濃いねん」
神八　「血のつながり、あらへん」
神弐　「なんでやね、きみのお父さんと娘やろ」
神八　「娘やけど、ぼくの女房のつれ子や」
神弐　「え？」
神八　「ぼくの嫁はんのつれ子や、うちの女房はね、ぼくんとこくるまでに結婚しとって、ほいで子どもがでけた。ほいで亭主に死なれて、その子をつれてこっちへきた」
神弐　「その娘ちゅうのは、きみが生ました子やないの」
神八　「ちがう、ちがう」
神弐　「それを先に言わんかい」
神八　「言うまもあらへんがな」
神弐　「ないことあるかい、義理の娘か」
神八　「そうや」
神弐　「そら文句いえんな」
神八　「できた孫ちゅうのは女の子でな、もうこのごろ、ニコッと笑うようになって、初孫って可愛いもんじゃ、おい」
神弐　「誰の孫やねん」

神八　「誰の孫て、たとえ義理でもぼくの娘にできた子や、ぼくの孫やないか」
神弐　「そやけど、娘の婿はきみのお父さんやろ」
神八　「そうや」
神弐　「そんなら、でけた子はきみとは兄弟やないか」
神八　「おい、そんなややこしいこを言いな、きみ、たいがい家族がもめてゴジャゴジャしているのに、はたからそんなこと言うたら、またややこしなってしまうやないか」
神弐　「どこがややこしいねん」
神八　「ぼくの娘にでけた子や」
神弐　「娘はわかってるけど、娘の婿はきみのお父さんやろ」
神八　「ところが、いま、これ、ぼくの倅になっとうが」
神弐　「倅？」
神八　「永年、ぼくの親父をやってきたが、今後ずっと倅をつとめてもらう」
神弐　「なんでお父さんが途中で倅になるねん」
神八　「娘の婿や」
神弐　「そういうから話がややこしなるねん」
神八　「なんでや」
神弐　「お父さんはお父さんにかわりあらへん、きみはどこまでいっても倅や」
神八　「どうしてもか」
神弐　「そらそや、そやから、きみのお父さんが、きみの娘といっしょになれば、この娘はお父さんの奥さんや」
神八　「まあ、そうやな」
神弐　「そんならきみのお母さんや」
神八　「お――お――お母さん――またこんなややこしいこと言いだしよった」
神弐　「え？」
神八　「娘がお母さんて――」
神弐　「前はきみの娘や、現在はお父さんの奥さんやろ、ほんならきみのお母さんやないか」
神八　「あ、そうか」
神弐　「そらそや」

神八　「こら知らなんだ」
神弐　「知らなんだちゅうことあるか、そやからその間に子どもができたら、できた子はきみとは兄弟になるねや」
神八　「ほな、あれ、ぼくの妹か」
神弐　「女の子なら腹違いの妹や」
神八　「こちゃ、そんなこと知らんさかい、おじいちゃんとこおいでってダッコしてたんや、ほな、あしたから、お兄ちゃんとこおいで言うんか」
神弐　「そらそや」
神八　「あ、照れくさ。ほな、ぼくの女房はどないなるねん」
神弐　「つまりやね、きみの奥さんはこの娘をつれてやね――」
神八　「いや、お母さんをつれてやろ」
神弐　「なんでやね、お母さんはきみの奥さんがお母さんや、この娘はきみの奥さんが産んだんやで」
神八　「そうや」
神弐　「そんなら、きみの奥さんがお母さんやないか」
神八　「いや、お父さんの奥さんやから、ぼくのお母さんや」
神弐　「いや、この娘はきみのお母さんや。娘のお母さんはきみの奥さんや。な、きみの奥さんのお母さんが、きみのお母さん――ややこしいな――この娘――これ、いまお母さん言うたらややこしい。これ、まだお母さんならん前、娘の時分、つまり娘の時分にお母さんにつれられてきみのところにきた」
神八　「そうや」
神弐　「で、きみら二人が結婚した」
神八　「ヒーフやな」
神弐　「ヒーフ？」
神八　「いやいや、ヤーフや」
神弐　「何を言うとんねん、きみら二人はトーフ――いや、豆腐やないわ、フーフやないかい」
神八　「ああ、夫婦ね」
神弐　「そやからこの娘にとっては、これがお母さんで、これがお父さん、これだけなら別にもめることはなかった」
神八　「ずっと段どりよういっとった」
神弐　「ところが、きみらにお父さんがおんねや」

神八　「これが一番ややこしいでしょう」
神弐　「つまり、この助平が――」
神八　「おい、ええかげんにしとけ、人の親をつかまえて助平とはどうや」
神弐　「いかんか」
神八　「つまりこのおいらく屋さんが」
神弐　「おいらく屋さん――このお父さんが娘といっしょになったんや。やっぱり娘の方はお母さんや。で、こんどはお母さんの方が娘になる。まわかりやすう説明すると、この娘のお母さんというのは、娘の婿の息子の嫁やろ――で、お母さんの娘の方は、お母さんの婿のおとっつァんの嫁やから、お母さんが嫁で、娘がしゅうとめや。ということは、この娘のお母さんであったお母さんは、娘の娘や。で、お母さんの娘であった娘の方は、今度、お母さんのお母さんになんねや」
神八　「――ほな、わたしは誰でしょう」
神弐　「そんなアホな」

神七　ワン　ツー　ワン　ツー　スリー　フォー

賑やかに音を鳴らし
神々がやってくる
♪「世界は日の出を待ってゐる」

♪いま
待つ
は
朝の
ひかり
世界は
はじまる

いま
ここ
で
生まれる

時
あなたが
はじまる

神九（ウズメ）
天香山の天の日影を手次（たすき）に繋けて
天の眞拆を鬘とし
天香山の小竹葉を手草に結ひて
天之石屋戸にうけ伏せて蹈みとどろこし
神懸りして
胸乳を掛き出で
裳緒を陰に押し垂れ
踊る

神八　女の手をとり
ともに踊る

高天原　動（とよ）みて
八百萬の神
共に咲（わら）ふ

女もやがて
笑ふ
大きな
大きな声で
笑ふ

神壱　ある
ある
あるぢやありませんか
神七　どうした
神壱　ある
海が

いま
ここに
水は満ち
波は満ち
海
海
が
ある

女　さう
海は
ある
水は
ある
そして
波が
いま
ここに
ある

神七　おめでたう……

それは
歌
に
なる

賑やかに
神々の歌ふ
祝ひの歌

♪海が
ある
水が
ある

波が
ある
おめでたう

神壱の前に
トヨタマヒメが
現れる
釣り針を渡す
そして
まぐはふ

♪空が
ある
雲が
ある
星が
ある
おめでたう

月が
ある
日が
ある
雨が
ある
おめでたう

川が
ある
野が
ある
山が
ある

おめでたう

木が
ある
花が
ある
土が
ある
おめでたう

草が
ある
草
たちが
そして
風が
ある
風が
ある
風が
ある
おめでたう
おめでたう
おめでたう

神々は
風のやうに
消へてゆく……
歌は
風に
溶けてゆく……

10 千年前

役人　はじまったようですね。
学者　……
役人　今日は宮中も、それから表も、あの日以来の、大変なにぎわいです。
学者　……
役人　なんだか久しく笑っていなかった、みんな、そんなことにあらためて気づいたみたいですね。あなたもお帰りの際にご覧になるといい。国民の誰もが、新しい王とともに、新しくこの国で生きようとする気概にあふれた、いい顔をしています。
学者　……
役人　ほんとに、今日はいい天気でよかった。
学者　……
役人　どうも長い間、ありがとうございました。そしてあらためてあなたにはおわび申し上げます。せっかく読み解いていただいたあの書が、まさか我が国のものではなかったとは、わたしも大変驚いています。
学者　……
役人　ほんとうに海はいろんなものを運んできます。わたしの祖父が言ったとおりでした。古の歴史さえ、異国から海が運んできたとは。
学者　わたしが……
役人　え？
学者　わたしが見た、見てしまったからでしょうか。あの景色を。
役人　何のことですか？
学者　この世界の最初の景色。まだ王も、ひとびともいなかった時の、この世界の景色。あの書に書かれていたその景色が、あなたがたの欲する物語ではなかった、そういうことなのではありませんか。
役人　何をおっしゃっているのかよくわかりません。よいですか、あの書は、この国ものではなかった。海が運び、おそらくどこかの浜辺に打ち上げられたものでしょう。その異国の歴史をわが国の物語とすることはできない、ただそれだけのことです。
学者　そこにはなにもなかった。青々と、ただ青々と、風に吹かれる草たちがいた。尊き王やその臣民である我々が、もともとは土の中から萌えだした草であったなどと、そんな物語をあなたがたは到底認められないでしょう。

役人　あなたはあまりに深く、この物語に入りこんでしまったようですね。
学者　そこにはなにもなかった。青々と、ただ青々と、風に吹かれる草たちがいた……
役人　さ、もう時間です。どうぞお帰りください。あなたはもう自由なのですから。
学者　どうして……
役人　え？
学者　どうして、わたしを自由にするのですか？あなたがたにとって都合の悪い物語を知ってしまった、わたしを。
役人　ですから申し上げたじゃないですか。都合の悪いことなど何もない、と。ただ、それは異国のもので、決してわが国の物語ではない、ただそれだけです。
学者　わたしがでも、このことを、わたしの見た景色を、その物語を広めたとしても、それでもあなたがたは平気なのですか。
役人　それは、その物語に耳を傾ける人がいればのことでしょう。仮にあの書があなたの言うように、この国の物語だとしても、いま、いったい誰がそんな物語を欲しがるでしょう。
学者　でも……
役人　たとえそれがほんとうだとしても、ひとびとは「ほんとうの物語」よりも、そうあって欲しいと自分が願う、「願望の物語」を欲しがるものです。そしてひとびとは知っています。いまはひとつにならなければならない時だと。隣国が、この喪の時を狙って、わが国に攻め込もうとしているのですから。
学者　それは、では、どのような物語なのですか。ひとびとがひとつになるための、その物語は。
役人　それはあなたが心配なさることではありません。あなたは立派にあなたの役目を果たされたのですから、どうぞ何もお気になさることなく、またふだんの生活にお戻りください。
学者　それは、その物語は、あなたがたが選んだその物語は、千年の先をも照らす光なのですか。
役人　さ、どうぞお帰りください。残念ですがこれ以上あなたにお答えすることはできないのです。それになにより、今日はこの国にとって、祝福の

一日なのですから。どうぞあなたもご覧になるといい。ひとびとの晴れやかなあの顔を。
学者　……
役人　わたくしはここでお暇いたします。なにしろ今日はお客様がたくさんいらっしゃるものですから。それでは。

役人、出ていく。
ひとり残される、学者。
ゆっくりと部屋を出ていこうとする。
ふと立ち止まった……

学者　風……

感じている。

学者　風が、吹いている……。
風……。
この風にのり……
千年の先まで
……届け
千年の先のひとよ
あなたのもとへ
届け……

10　千年先

風が吹いてゐる
その野に
女と
その隣には
男が
ゐる

女　これは
男　どうしました
女　あたしの
こと
あたしに
起きたこと
それとも
あたしの
書いた
物語
男　さあて
いったいどっち
なんでせう
女　どっちでも
もう
どっちでも
かまはない
あたしは
アリス
の
姉でゐやう
アリスから
夢見た夢を聞いた
姉　それが
夢であると強く知りつつ
それでも
その夢を引き継いだ
アリスの姉
だから
あたしは
アリスの姉で
ゐやう

どつちであらうと
これは
たしかに
あたし
あたしの
からだの中に
ある
あたしの
からだの中に
吹く
風
その
風の
歌ふ
物語

生きて
ゐる
ここに
ぜんぶは
生きて
ゐる
あたしの
出会つて
きた
人たち
あたしが
夢見た
人たち
それは
ぜんぶ
等しく
ここに

生きて
ゐる

だから
過去
なんて
ない
ぜんぶは
いま
いま
いま
のこと

ぜんぶは
いま
の中に
ある
ことの起こり
と
いま
は
いつも
同じく
そこにある

昨日
は
明日
とともに
今日
に
ある
いま

に
ある
さて
―――

男

？
そろそろ
帰る
時です

女

帰る？
どこへ？

男

どこ？
どこなんでせうか
それは
わたしにも
わかりません
けれど
あなたは
知つてゐる
たとへ
あなたは知らずとも
あなたのからだは
知つてゐる

女

さう
あたしは
知つてゐる
あたしの
からだは
知つてゐる
あたしの
帰る
還る
ところ

風が吹く

女

風
風に
風に草
風に草が
風に草が揺れてゐる
風に青々とした草たちが揺れてゐる
青々とした草たちが風に波立つ
やがて土に還る青々として草たちが
いま　風に波立つ
波
立つ
ことば
あなたの
ことば

男

が
生まれました
ことば
が
成りました
ね
あなたの
あの
ことば
が
ことば

女

あたしの
ことば
あたしだけの
ぢやない
遠い昔からの
いまここにある

ことば
この
あたしのことばは
だれのいのちをも
救わない
だれのいのちをも
永らわせない
けれど
あたしのことばは
祝ふ
だれのいのちをも
すべてのいのちを
ただ
祝ふ
それが
いま
ここにあることを

いつの間にか子（神拾）がゐる

子　おかへりなさい
女　？

子　女を抱きしめる

子　はじめまして
あなたの息子です
女　え？
子　あなたから
生まれた
わたし
が
いま

あなたを
抱きしめる
わたしは生れた
あなたから
あなたのことばから
あなたのことばが
わたしをつくつた
はじめまして
あなたの息子です
あなたの
ことばの
読者です
読みの
国から
ここに
成つた
読む
者です
あなたの
読者です
あなたの
息子です
ありがたう
母さん

女　笑ひだす
そして　男を見る

女　やつぱり
あなた
だつたのですね
あたしのことば
それを

待つてゐる
といふのは
あなた
だつたんですね

男　……
女　待つてゐて
くれたんですね
あたしのことばを
あたしを
そして
あたしたち
結ばれるのですか

男　ええ
女　あたしが
あなたと

男　ええ
女　いつ
男　いま
けれど
或ひは
それは
いま
は
これから
先のこと
そして
二万七千年
前のこと

女　あなたは
ゐて

男　ええ
ぼくは
ゐます

女　いま
ここに
そして
あたしに
恋した

男　恋しています
いま

女　あたしと
まぐはひ
した

男　しています
いま
或ひは
二万七千年前

女　そして
これから
あたしは
あたしたちは
結ばれる

男　いま
いま

子　やがて
わたしは
生まれ
さうして
母に会ふ
かつて
わたしの娘だつた
わたしの母に

女　やがて
わたしは
生み
さうして

父に会ふ
かつて
わたしの息子であつた
わたしの父に

子　やがて
やがて
やがて
……

子は次第に小さくなり
光の一粒の雫となる

男　この
闇
この
くらげのやうな
混沌のやうな
闇
闇
その闇に
ふたりで
天沼矛を
さしおろし
こをろこをろ
に画き鳴して
引き上ぐる時に
其の矛の末（さき）より
垂り落つることば
累なり積もりて
光と成るでせう
やがてその光が
二万七千前に
生まれた

女　その光が
いま
わたしたちを
照らす
この
古（いにしへ）の
物語は
ここに
この胸の奥に
記された
この
古（いにしへ）の
物語は
わたしの
なかで
いつも
歌つてゐる
あの日の
歌を
わたしが
ここに
ゐる
そのことを
教へてくれる
あの日の
歌を

聞いてゐる
聞いてゐる
わたし
といふ
わたし
は

いま
ここに
ゐる
聞いてゐる
聞こえてゐる

うた
うた

波が歌ってゐる
星が歌ってゐる
雨が歌ってゐる
草が歌ってゐる
風が歌ってゐる

どこか遠くから賑やかに聞こえてくる音
♪「世界は日の出を待ってゐる」
神々が音を鳴らし踊ってゐるだらう
男と女　見つめ合ひ　笑ふ

あの日の学者もゐる

学者　ここにその妹伊邪那美命に問ひて曰はく
男　「汝が身は如何に成れる」
学者　答へてまをさく
女　「吾が身は成り成りて　成り合はざるところ一處あり」
学者　ここに伊邪那岐命詔りつらく
男　「我が身は成り成りて　成り餘れるところ一處あり
故この吾が身の成り餘れる處を
汝が身の成り合はぬ處に刺し塞ぎて
國土（くに）生み成さむとおもふ
生むことといかに」
女　「しか善けむ」

男　「然らば吾と汝と　みとのまぐはひせむ」
女　「あなにやし　えをとめを」
「あなにやし　えをとこを」
学者　と
言ひました

それは
天地（あまつち）の
初めて発（ひら）くる
時
の
はなし

風が吹き
草たちは
波たっていました

風が
吹く

終

【参考・引用文献】

鈴木三重吉「古事記物語」角川ソフィア文庫
こうの史代「ぼおるぺん古事記」平凡社
倉野憲司校注「古事記」岩波文庫
三浦佑之「古事記を読みなおす」ちくま新書
三浦佑之「口語訳古事記」文藝春秋
長部日出雄「古事記とは何か」集英社文庫
柳田國男「稗田阿礼」
大塚ひかり「愛とまぐはひの古事記」ちくま文庫
中田ダイマル・ラケット「家族混戦曲」
野田秀樹「二万七千光年の旅」而立書房
ルイス・キャロル　福島正実訳「不思議の国のアリス」角川文庫
ほか